目次

彼女と彼 ―――― 明子 一
彼女と私 ―――― 明子 一五
むきだしの電線 ―――― 蒼倉くく 二一
天弓を射る ―――― 蒼倉くく 二六
リアリストが悟る夢 ―――― 蒼倉くく 二八
花の夢 ―――― 0625 三二

彼女と彼

明子

「おはよ、マコト」
「おはよう」
幼なじみのマコトと付き合うようになってから、二人でいることがさらに増えた私とマコト。
付き合う前はいつも三人でいた。でももう一人は、片割れはもういない。
「髪、伸びたね」
「そう？マコトって長い髪好きだから、また伸ばそうと思って」
そんな会話をしながら、学校へ向かった。

「おはよー、ハル」
「おはーよ」
挨拶が飛び交う中で、私とマコトは教室にたどり着いた。
マコトは仲のいい男子グループに連れ込まれていき、私と離れ離れになってしまった。私も仲のいい女子グループの輪の中に入っていた。
付き合っているからと言って、学校でいつも一緒なわけじゃないし、一緒なのは登下校のときぐらいだ。
でも、それを嫌だと思うこともなく、これが私たちのスタイルだと思っていた。

「あ、ハル。河本先生が、すぐ図書室に来るように、だって」
「やっぱ。図書委員当番のことだよ、ぜったい……」
「はは、がんばって」
仲のいい女子グループのうちの一人に言われ、教室を飛び出した。

「長谷川さ～ん」
「はい……」
校舎とは別に建てられている図書室にたどり着いて、すぐに河本先生特有の高い声で呼ばれた。
ここの図書室は、図書室というより、図書館と呼ぶほうがふさわしいぐらい、大きい。一般の人も使用していて、当番など本返却を管理しているのは図書委員のため、図書委員という仕事はとても重要なのである。
「図書委員が朝当番さぼっちゃダメでしょー」
「はい……」
「最近、妹さんが亡くなってしまったとは言え、たるんでないかしら？」
「……」
「まぁまぁ、河本先生」
嫌味ったらしで有名な河本先生を制したのは、横から入ってきた彼だった。
「こうして来てくれただけで、よしとしませんか？」
「遊佐くんがそう言うのなら仕方ないわね…」
かっこいいヒト大好きな河本先生は、彼の顔を見るなり、手のひらを返すかのように、声をさらに高くした。
「とりあえず、長谷川さん、今日は遊佐くんと本の返却当番だから」

「はい、ありがとうございます」
コツコツとヒールの音を響かせながら、この場を去って行く。その背中を見送ってから、急いで持ち場についた。
本の返却当番の仕事は、借りて返って来た本を、もとに場所に戻す作業のことである。
朝の図書室はヒトがいないに等しいから、話しながらできるため、仲良い子とやれば、会話も弾んで楽しい。けど、後輩である彼だと話は別だ。
あまり話したことないって言うのはあるけれど、運動面でも学習面においても、完璧な彼は変人だ。
入学式早々、先生が書いた新入生挨拶の紙に書いてあった漢字間違いを舞台の上で指摘するなど、校長先生と保健室の先生との不倫関係を本人の前で指摘するなど、彼の行動と言動は奇妙なものばかりだった。
それでも、彼があまり煙たがられることがないのは、ゾッとするほど綺麗な顔のせいだろう。
そんな彼と当番をするのは初めてだけれど、彼とは関わりたくなかった。

図書室専用の緑のエプロンに、白い薄地の手袋をして、黙々と本を棚に戻して行く彼と私。
変な気まずさがこの場を包み込むけれど、声を掛けようとも思わなかった。
けれど、彼に背を向けて作業している私に、彼は話しかけて来た。
「長谷川先輩」
「……なに？」
ここで嫌悪感を出すのも、ヒトとしてどうかと思うから、彼に笑顔を向けて、できるだけ明るい声で返事をした。……つもり。
「『ふたりのロッテ』って知ってます？」
「……たしか、オーストリアを舞台にした話だったよね？」

「そうです。あの話で、双子が入れ替わりますよね？」
「……そうね」
「先輩はどう思いますか？ 双子が入れ替わるのって」
彼の手には『ふたりのロッテ』の絵本が乗せてあり、それをペラペラとページを捲って読んでいた。
読みながら、本棚にもたれ掛かる彼は、とても様になっていた。
「なぜそんなことを聞くの？」
「先輩は双子だったじゃないですか？」
「……」
常識を言うかのようにあっけらかんと言う彼。
触れてほしくない所に触れて来た彼に、腹立たしい気持ちに見舞われる。
「……そんなこと考えたくないっ」
「なんでですか？」
「私はもう双子じゃない」
「ふーん、嫌なんですね。妹さんを思い出すのが」
ヒトを見下すよな、バカにしたかのような言い方をしてくる彼は、こう言えば言い返すことがわかっていて、こんな言い方をするのかもしれない。
そんなとこがさらに私の癪に触る。
だから、私は落ち着いて、彼に向かって口を開いた。
「嫌に決まってるでしょ。私の目の前で、彼女は落ちたのよ？ 彼女は手を伸ばして来たのに、私はそれを掴めなかったのよ？」
「それは全て、先輩の後悔と懺悔であって、彼女とは何の関係がないじゃないですか」

急に真顔になって、私を睨みつける彼。
その真顔の迫力に、背筋が凍った。
それがわかったのか、彼は「これは失礼」と穏やかな顔で言うと、再び口を開いた。
「……先輩は自分を思いやってばかで、あいつのことは全然思いやってないじゃないですか？口を開けば、自分の傷口を主張するばっかですね」
その言葉が、重く、深く、のしかかってくる。
目線がどんどん下がって行く。
彼の感情が読み取れないのがコワい。
「俺は……」
キーンコーンカーンコーン。
彼が口を開いた瞬間に、チャイムが鳴り響いた。
『ＳＨＲ開始のチャイムが鳴りました。生徒はすみやかに教室に向かいなさい』
図書室に流れる河本先生の放送で、作業は終了した。
チャイムに遮られた言葉を、彼は言い直すつもりがないのか、そのままエプロンを脱いで、私の顔を見ることなく、去って行った。
取り残された私は、顔を上げることができなかった。

放課後のざわざわした声が、やけに耳につく。
「ハルーっ、今日も図書室？」

「うん、当番だしねー」
「そっか、がんばってねー、ばいばい」
そんなやり取りを何回かした後に、ようやくマコトの席まで辿り着けた。
やっぱり、窓際の一番後ろのマコトの席と、ドア側の一番前の私の席の距離だといろいろと不便だな……。
「マコト、今日は部活は何時まで？」
「今日は、いつもどおりだ。図書室にいるんだよな？」
「うん、当番だしね」
サッカー部のマコトが、部活が終わるのを待つのは、図書室って決まっていた。
でも今日はできれば図書室には行きたくなかった。
「それじゃ、頑張ってね」
「おう」
手を振って、部室に向かうマコトを見送り、今朝の図書室でのできごとを忘れるかのように、今日習った数学の公式を思い返していた。
「先輩――」
「！？」
気配もなく近づいて来た彼に、驚きのあまり、大きく後ずさりしてしまった。
「そんなに驚かなくても……」
「……」
何もなかったかのように話しかけてくる彼は、相変わらず感情が読み取れない。
「先輩、今から暇ですか？」
「暇ってあなたも私も当番でしょ……？」

「それもそうですね……、あ、松野くん」
そのとき丁度通りかかった、いかにもガリ勉ですという雰囲気を醸し出す男子生徒が、彼によって引き止められた。
松野くん、というらしい男子生徒は図書室に向かっているらしく、彼に呼び止められて、怯えるかのように「は、はい」と返事をした。
「松野くん、お願いがあるんだけど、図書委員の仕事やってくれないかな？」
「な、なんで、僕が……、僕は今から図書室で勉強するのに……」
「次の中間テストのヤマ、教えてあげる」
「わかった」
……あっさりなのね……。
急にキリッとした顔つきになった松野くんは、「それじゃ、よろしく」とだけ告げると、さっきよりも軽い足取りで図書室に向かって行った。
「そんなにヤマ、当たるの？」
「先生ってわかりやすいですから、ヤマ当てるなんて誰だってできますよ」
サラッと言うところが、なんとも彼らしい……。
「なにその持ってるペン？」
さっき会ったときから、ずっと彼の手に握られているペン。見たことのないタイプの ペンだったので、異様に気になった。
「あぁ、これですか？ 僕は物作りが好きなんで、ラメ赤褐色のポスカなんか作ってみたんですよ」
なんともまぁ、変な人は変なことばかりするのね……。
「それで、ここに何の用事なの？」

松野くんと別れすぐに、図書室とは別の方向に向かって歩き出した彼について来た私だけど、芝生グラウンドに何の用事があるのかわからなかった。
芝生グラウンドと土グラウンドがあるこの学校は、真ん中の校舎と図書室を境に分かれていて、芝生グラウンドは主にサッカー部が使用している。
八十人近くいるサッカー部員は、外周をしているのか、飲み物のボトルを用意するマネージャーしかいなかった。
芝生グラウンドをヅカヅカと横切る彼は、マネージャー達のもとに辿り着くと、学年色別の青ジャージーを着ているところから、三年生だとわかるヒトに声を掛けた。
「初めまして、図書委員の遊佐です」
「はぁ、どうも……」
明らかに彼を警戒しているマネージャーさん。
そんなおかまいなしにニコニコ笑う彼は、他のマネージャーと距離を取り、そのマネージャーさんと話し始めた。
私は彼の行動がわからずに、近くで二人の話を聞いていた。
「あの、坂本先輩は、夏目漱石の『こころ』という本を、ちょうど二ヶ月前からまだ返していませんよね？」
「あ！ そうだった、返してなかった……。つい面白いから、返すの渋ってたら、忘れてた……」
「あれ、面白いですからね」
「ね！ あの重苦しい感じが好きなの！」
「そうなんですか。そういう感じの本、ご紹介いたしますよ？」
「ほんと？ ありがと」
彼はマネージャーさんの心をがっちり掴みました……。

胡散臭いほど清々しい笑顔だが、惚れ惚れするような笑顔には変わりない。
「ここから、校舎ってよく見えるんですね」
「あ、うん。わりとね」
「そういえば、最近、事件がありましたよね」
「あー、あれね。びっくりしたよ。長谷川姉妹の妹がね、落ちてくるんだもん……」
私を気にしているのか、歯切れ悪く話す坂本先輩は、私が反応しなかったことに、聞こえてないと思ったのか、声を小声をしながらも、会話を続けた。
「ご存知なんですね？ 長谷川姉妹」
「だって、あんな容姿端麗なのが二人でいるんだもん。一人でも目立つのに、二人だとね～……」
「それもそうですね。それで、落ちるのを見たっていうのは？」
「あぁ、なんかね、長谷川妹がマコトくんを指差してたの。ほら長谷川姉妹とマコトくんって幼なじみで仲良いでしょ？ 姉の方は付き合ってるし。それで、呼ぼうとしたのかなんなのか知らないけど、少し身を乗り出した瞬間に、ズルッとね」
「……そうなんですか」
「坂本先輩ー、部員が外周から帰ってきました！」
「あ、それじゃ、図書室に今度返しとくね。ありがとね！」
後輩マネージャーに呼ばれた坂本先輩は、慌ただしく持ち場に戻った。
戻って来た部員の中に、マコトもいたけれど、声をかける気分になれず、マコトがこっちを見ていると知っていながらも、彼とそそくさとその場をあとにした。
「どういうつもり？」
「はい？」

芝生グラウンドを抜けて、校舎へと入って行く彼について行く私は、彼に怒りむき出しで尋ねた。
しらばっくれる彼にピッキと青筋が立ちそうになる。
「なんで詮索してるのかって」
「あぁ」
「あぁ、じゃなくて、」
「認めたくないだけです。彼女の死を」
階段を上がる足音と、彼の言葉が小さく響いた。
私はそれ以上何も言えなくて、黙って彼の後をついて行った。

私の双子の、瓜二つの妹のアキは、一週間前に窓から転落して亡くなった。
その場に一緒にいたのは私だった。芝生グラウンドでサッカーをするマコトを見つけた彼女は、ガールフレンドである私がいることを気づかせてやろうと思ったのか、マコトを呼ぶために、身を乗り出した瞬間、スローモーションでも見ているかのように、彼女はゆっくりと地上に向かって行った。
彼女は落ちる瞬間、私に手を差し出した。
届かない手。
落ちて行く彼女。
私を見つめる瞳。
あの瞬間、世界が変わった。

彼が向かった場所は、私と彼女とマコトのクラスの教室だった。

そして、彼女はこの四階の教室から落ちた。
窓際の後ろから二番目の彼女の席に、たくさんの花が置かれている。
そして、その席のすぐ横の窓から、彼女は落ちた。

「なぜ、ここへ？」
暫くの間、彼が彼女の席の横に立って、彼女の席と窓を見つめていた。
「……さっき、マネージャーたちの位置から見たとき、グラウンドから一番遠いあそこからでも、窓際で何をしているか、判断できるだろうと思った」
「……」
彼女の席の花を眺めながら、私に背を向ける彼。
だから、彼がどんな表情をしているかわからなかった。
「彼女を落としたのは、あなた……ですよね」
「……？」
突然、何を言い出すかと思えば、そんなことあるわけないわ。
「ここの窓から床までの高さは、わりと高いですよね。身長の低かった彼女は落ちないと思いますよ。押したりしないかぎり。でも押したらグラウンドから見えてしまう。だから、別の方法で落としたと思いましてね、先輩が」
「だ、だからと言って、私が足をひっかけて落としたとは限らないじゃない」
早口で私は、何を口走ってしまったのだろう。
「先輩も限界じゃないんですか？ ヒトを殺して、黙っていられるほど、強くないと思いますけど、先輩は。誰かに気がついてほしいのではないでしょうかね」

相変わらず背を向けて話す彼の口調は変わらない。
「あと、あんたは死んだはずのアキだな？」
「……！」
なんで、それには気がつかれてないはずなのに。
私は何も言えずに、床を見つめていた。
「彼女は、何か持って落ちなかったか？」
「ペン、ペンを持ってた……」
「ここの窓のサンのところについている紅色は、たぶん、ペンを持って落ちたときについたんだろうな。俺が作って彼女にあげた、ラメ紅色のポスカ。彼女があんたになったときから、彼女じゃない、と薄々感じていたが、この紅色で確信を得た」
「……」
「彼女の長かった髪を短くしたのもあんただよ？ それに、彼女が死ぬ少し前に、あんたは、長谷川アキは『ふたりのロッテ』を借りてたからな」

双子が入れ替わる物語の『ふたりのロッテ』。
偶然出会ったロッテとルィーゼは、顔がそっくり。自分たちが実は双子であり、親が離婚したために離れ離れになっていたことを知る。二人は互いを入れ替える。けれど性格が正反対なので、戻ってきた子どもの様変わりに親はびっくりし、トンチンカンな出来事がたくさん起こる、という物語だ。
二人は両親を仲直りさせるために、入れ替わった。
でも、私は……、

『ふたりのロッテ』が両親を仲直りさせるために入れ替わったように、私はマコトと一緒になるために、彼女のきれいな長い髪の毛を無理矢理切って、入れ替わる計画を立てた」

人間その気なれば、本当になんでもできちゃう。

たとえ、それが誰を傷つけようとも、一時の衝動と欲望でなんでもしてしまう。

私の震える声で言った言葉に対して、彼は思いがけないことを口にした。

「マコトっていう奴は、たぶん、彼女は彼女じゃない、あんただってことに気がついてる」

「！」

「そもそも、マコトはたぶん、もとからあなたを好きなんだ。そして、彼女も気づいていた。あんたとマコトが両思いなことに。彼女は……、マコトにあんたを取られなくなったんだと俺は思うけど、本当のことはわからない」

「……」

「でも、真実を確かめたところで、彼女は……ハルはもういない」

彼がこちらを向いた。

初めて、彼の感情を読み取れた。

悲しみの感情を。

*

私は、彼と彼女の間に何があったのか知らない。
でも、私には知らないことが二人の間にあったのは確かで……、
それを知ることは一生ないのだろう。

私は、〝私〟という存在を殺し、〝彼女〟という実体を殺した。
そして、〝私〟という実体は〝彼女〟になった。

私は彼女。
彼女は私。

私と彼女

明子

彼女はとても美しかった。
そんな彼女と私は、瓜二つの双子。
私と同じ顔なのに。私と同じ声なのに。

彼女の髪の毛が、長く綺麗なせいだろうか。
彼女のほうが、上を行くせいだろうか。
そんな彼女が大好きだ。

＊

眩しい日差しが、私に直射する。私は、彼女を待っていた。
そして、彼女が、私の名前を呼ぶ。私と同じ声で。
そして、私と彼女の幼なじみである彼をつれて。
「どしたの？ ハル」
「あのね！アキ、私、マコトと付き合うことになったの」
頬をほのかに染めて、本当に嬉しそうに微笑む彼女。
その微笑みを見て、一緒に嬉しそうに微笑む彼。
「そうなんだ！ やったね」
「うん！」

彼と彼女が、両思いなのは知っていた。
私が、彼と彼女にそのことを言わなかったのは、二人の力で付き合ってほしかったから。二人の力で、気がついてほしかったから。

「ハル、まだ勉強してるの？」
「うん」
彼と彼女が付き合っても、彼女の平日の過ごし方は変わっていなかった。
彼と電話する時間や、彼と会う時間を作るでもなく、彼のために何かをするわけではなかった。
だから、今日も彼女はいつものように七時間勉強していた。

そんな彼女は、いつも一番だった。
一番になっても、奢ることもない。
一番になっても、やめることもない。
『一番でも、上には上がいるの』常に上を見つめる彼女。
状況が変わろうと、状態が変わろうと、彼女の向上心は変わらない。
彼は、彼女のそんなところに惹かれたのかもしれない。
私は、いつも二番だった。
どんなに頑張っても。
そう、いつも私は彼女の下。彼女は私の上を行く。

彼と彼女が付き合ってから、私たちにに変わったことが一つだけあった。
それは、私と彼と彼女が、一緒に学校へ行かなくなったことだ。
家が近い私たちと彼が、一緒に学校へ行くのは、小学校からずっと続いていたことだ。でも、さすがに彼と彼女を邪魔できない。邪魔したくない。
彼と彼女が付き合ってから、初めて学校へ行くことになった。
気を遣うだろうな、と思っていたけど、昔と変わらなかった。
昔のように他愛のない話をして、昔のように笑い合って、昔のように……、
彼の手が、彼女の長く綺麗な髪に触れた。
彼が、彼女の長く綺麗な髪の毛を好きなことも知っていた。
彼が、彼女の長く綺麗な髪の毛に触れたいことも知っていた。

そんな彼女の髪の毛が、次の日に、私の髪の毛と同じ長さになった。
理由はなぜか聞けなかった。
見分けをつけるために、私は髪の毛を短くし、彼女は髪の毛を長くしたのに、これじゃあ見分けがつかなくなってしまった。
彼でさえ、すぐに見分けがつかなかった。

そして、その衝動は、とうとう起こってしまった。

放課後、窓際で外を眺める私は、彼を待ちながら教室で勉強している彼女を、窓際に呼び寄せた。
そして、サッカー部の活動をしている彼を、指差した。
身を乗り出して彼を探す彼女に、気がついたら、足をひっかけていた。
気がついたら、彼女を四階から足をひっかけて落としていた。
気がついたら、彼女は私の目の前にいなかった。

そして、気がついた。

私は彼女なのだ、と。

*

『そんな彼女が大好きだ』憎らしいほどに。

『私が、彼と彼女にそのことを言わなかったのは、二人の力で付き合ってほしかったから。二人の力で、気がついてほしかったから』そう思いたかった。

『私と彼と彼女が、一緒に学校へ行かなくなったことだ』彼と彼女を見たくなかった。

『彼と彼女が付き合ってから、初めて学校へ行くことになった』それでも、それしか彼と一緒にいる方法がなかった。

『理由はなぜか聞けなかった』だって、嫌がる彼女の髪の毛を、無理矢理切ったのは私。

*

呆然と立ち尽くす彼女。
そこへ彼がやってくる。
「マ、マコト」
「ハル……か」

「アキが……、アキが……うぅうっ」
「ハル……」
そう言った彼は、彼女の傍によった。

＊

私は彼女になった。
彼女は私になった。

彼女は私。
私は彼女。

むきだしの電線

蒼倉くく

最近は、片親なんてものもめずらしくはないし、そうじゃなくたって親が駄目人間だということもある。それは子供という立場にいる私たちにはどうしようもないことだし、そこから生じる価値観の違いとかはどうしようもないものだ。だから普通に普通の家庭で育ってきた私には、親の存在云々に固執する人たちの気持ちなんて、全く理解できない。みんなそうだ。自分と違う立場の人の気持ちなんて理解できるものじゃない。仕方がないのだ。奈々世が瑞穂のことを理解出来ないのも、瑞穂が奈々世のことを理解出来ないのも、私が二人のことを理解できないのも、仕方がないことなのだ。

「お母さんがいる人は、いいよねぇ……」

そんなことをつぶやいたのは、幼いころから父子家庭で育ってきた瑞穂だった。

母親がいない寂しさは常にあるようで、寂しさを孕んだ一言が痛々しい。

放課後の部室に仲のいい三人で居残り、なんてよくあるシチュエーション。その中で、私と瑞穂と奈々世の、親友と称される親しい関係がピキリと音を立てた。

きっと些細な一言。だけどその言葉は奈々世の前ではタブー。奈々世のむき出した電線に触れてしまうからだ。

「……お母さんがいるからって、幸せとは限らないじゃん。」

案の定、だ。奈々世が尖った声を上げた。
奈々世にはちゃんとお母さんもいる。けど、そのお母さんはかなり理不尽な性格のようで、奈々世はお母さんから何度も嫌な目に遭わされているらしい。そんな奈々世の言うことは、得てして正論で、お母さんがいても幸せじゃない例を、奈々世が実証している。

お母さんを欲しがっている瑞穂と、お母さんが消えればいいと思う奈々世。
お互いに癪で許しがたいところが、一気に露呈された。
二律背反な二人の電線。それを、ことさらに刺激しはじめる。ボロボロになってしまうのも分からずに。

「いくらお母さんひどいひとだとしても、やっぱりお母さんがいる人は羨ましいよ。お母さんがいない寂しさも辛さも知らないんでいいんだから」

瑞穂にしてはめずらしく、怒ったような声でそう言った。

「じゃあ、母親に虐げられる苦しみを知らない人も羨ましいね。そうやって欲しがっているだけだもんね。」

奈々世がそう言い返す。最早、ケンカ腰の口調で。

剥き出しの電線が、バチバチと火花を散らし始めた。軽蔑まじりの目と言葉。事態はかなり深刻なよう。

私は、それを見ているだけだった。倒壊するコンクリートを眺める野次馬のように、ぼんやりと崩れ落ちる様子を眺めている。だってこんなの手を出しようがないじゃないか。二人とも、キレてしまっているのだ。ここから二人を仲直りさせる、……いや、この言い合いをひとまず止めるだけでも大変な労力がいるだろう。

ああ、私たちは親友じゃなかったのか？　私はこの期に及んで、瑞穂と奈々世が絶交したあとの、自分の立場の保身を算段しはじめていたのだ。

「前から思っていたけど、奈々世はわがままだよね。ちゃんとお母さんがいるのに、死ねとか消えろとか、殺すとかそんなことばっかり言って、私みたいな人の事もちゃんと考えてよ」

「瑞穂こそ、調子よく母親さえいればいいみたいなこと言うこと、やめてよね。

私みたいな人の事も考えて、鬱陶しいっ」

息を飲む音。エスカレートしていく台詞。荒げられた奈々世の声。

どうも、奈々世は沸点が低いように思う。簡単に暴言を連ねる母親譲りの唇。ねぇ奈々世、君のそうゆうところ、陰ではけっこう叩かれてるんだよ。知ってる？

瑞穂の肩が泣きそうに震え出した。

……算出結果が出ました。私は瑞穂の手を取った。

「奈々世、最低だね。」

私はそう言ってやった。奈々世より綺麗な口をきく瑞穂の代わりに。

ずっと中立にいた私がそうやって奈々世を傷つけたことで、奈々世は孤立する。奈々世は、私と瑞穂を泣きそうな目で睨んでから、スクールバックを引っ掴んで部屋から出て行った。

その細っこい背中を見ながら思う。奈々世のこと、けっこう好きだよって。でも仕方ないね。

瑞穂は、本格的に泣きはじめていた。希望を覗かせる瞳から流れる涙。

私は、瑞穂を慰め、奈々世に罵倒を浴びせながら、それでもこの期に及んで、そんな言葉とは真逆の事を考えていた。

奈々世は、そこまで悪くない、と。

お母さんをほしがっている瑞穂と、お母さんが消えればいいと思う奈々世。二律背反な二人の電線。それが触れ合ってしまったのだから、二人が反発し合ってしまうのは道理。瑞穂も奈々世も両方正しくて、どちらも譲歩できないのだ。電線……彼女たちがキレてしまうポイント。触れてしまったら、感電してしまうのだ感電して死んでしまわないように、私は奈々世を身代わりにした。

だって奈々世の方が皆に好かれてないし。先に泣いたのは瑞穂だし。……きっとこれも仕方がないことなのだ。

机の上に放られた下敷きに貼られたプリクラには、壊れそうな「親友」の文字と、作り笑顔。

仕方がないのは分かっている。けど、切なさにお腹が痛かった。

天弓を射る

蒼倉くく

「虹に会いに行こうよ」
「二人で」

あれは、何歳の時だったっけ？
うん、確か幼稚園の年長さんの時だったと思う。

あの日は雨が降っていた。
いや、正確に言うと「あの日は」じゃない。
あの日を合わせた一週間ほど、ずっと雨が降っていた。
雨で外に出られずに、君と二人で部屋に籠って、
そして、冒頭の契りを結んだ。

雨が降った直後の晴れ間に、ときおり空に架かる虹。
それを見られるかもしれない……。

そんな想いだけで、退屈な雨の日を過ごしてきた。
だけど、一週間もずっと虹の可能性だけで、
外出を我慢するのが辛くなってきたころ。
そしたら、君は、冒頭の約束を作った。
二人で、虹に会いに行こう、と。
明日、晴れますように。って。

ここまで。確かな記憶ではないのだけど。
約束は、破られた。二人で、っていう部分が。
君は、虹に会ったのだろう。君はいま、虹の中にいるのだろう。
……僕を残して。

君の灰煙が、虹に溶けていく。
虹の感触は、どうですか？

気づいたら、虹は霞んでいた。
さよならだ。虹と、君と、あの日の約束。

リアリストが悟る夢

蒼倉くく

それは国会議事堂前の様子だった。
何百人もの人間が集まっていて、なにやら集会のようなものが開かれている。これだけの人数が屋外に集まっているにもかかわらず、やけに落ち着いた雰囲気だ。
その集会の中心に、生白い脚が美しい女性が立っている。その手にはマイクが握られていて、なにやら演説をするようだ。

「日本国民のみなさん、こんにちは。ストッキング撲滅委員会会長です。
今日は私たちの主張を聞いていただきたいのです。
それは私が子供のころの話にさかのぼります。
そうですね……、私が通っていた幼稚園の先生や、行きつけの小児科の看護婦さんたち、街ですれ違うOLでも。まぁ、幼いころの私が知り得た大人の女性というものはですね、皆、ストッキングを履いていたんです。……ええ、ここから私たちの話は始まるのですが。
さて皆さん、ストッキングを履いた女性の脚を思い出していただきたい。よくある膝丈のタイトスカートから覗く、ストッキングを履いた脚です。……そう、くすんだ色で、手触りもざらざらなあの脚を、思い浮かべていただけましたか。

幼少時の私は、そのストッキングのせいで、大人になることが怖かったのです。
詳しく説明いたしましょう。
幼いころの私の周りにいた大人の女性は皆、そう全員がストッキングを履いていたのです。そのせいで私はストッキングを履いた足が生脚だと勘違いしていたのです。だから私は、女性というものは皆、大人になると脚が汚くなってしまう、そう思い込んでいたのです。
ただの思い込みじゃないか、と笑われるかもしれません。しかし、まだ子供だったころの私にとって、それは深刻な問題でした。私はその誤解が解けるまで、ずっと大人になることを恐れていたのですから。
さて、まだ幼い子供が、このように未来を恐れるなんて、ナンセンスなことだと思いませんか？
有志の方々にアンケートを募ったところ、幼少時同じような勘違いをしていた人が、思った以上にたくさんいらっしゃることがわかりました。そこで、私たちは立ち上がったのです。この世からストッキングを追放しようと！ ストッキングは、子供に未来を恐れさせる原因であるのです！
この国の未来を担う役割を持つ子供たちが未来を恐れているとしたら、私たちは、少しでもその恐怖をなくさなければならないはずです。ストッキングが子供たちを恐怖させる一因ならば、それも根絶いたしましょう。子供たちの夢を、守ってあげるのです！
さあ皆さんも子供たちのために立ち上がりましょう！ ストッキング撲滅万歳！ ストッキング撲滅万歳！！」

今日はそんな朝。それは確かに夢のようだ。

ちょうど下りてきた遮断機のギリギリ、線路の一番そばにまで近づいてみるのは、ほんの些細な憂さ晴らしのようなものだった。

それは簡易版リストカットとも言い換えられるもので、ほんの少し危なっかしいことをしてみたいだけだ。スリルと優越感を求めるもの。別に線路内に躍り出ようというわけではない。……あまりに簡易すぎて、まったくなんの憂いも晴れないところが欠点である。

機械類は、朝から機嫌がよくなかった。そもそもかなり不透明な心地で家を出たのだ。さらにここまでの道中で、道幅いっぱいに広がって歩く小学生やら中学生やらと鉢合わせてしまい、機械類はうっすらと不快であった。はっきりとした不快でないのは、機械類がリアリストであることに起因している。人間は歩く際に、特に多人数の子供である場合は尚更で、周囲に気を配ったりすることはない。いくら注意したところで、それは癖のようなものであるためどうにかなるはずがないのだ。ならば機械類はできるだけ目くじらを立てないようにするのが、精神衛生的にいちばんよいのだ。機械類はここまで考えて把握した上で、できるだけ不快をあやふやに感じとることができているのだった。

遮断機が下りてからしばしのタイムラグを経て、電車が踏み切りに迫ってきた。電車の顔が、なんとなく歪んだ風に拡大されていき、……大きな音と風と熱気をバシバシとこちらに伝えてきた。やはり、憂さ晴らしにはならない。目の前を走る車体には、スリルもなにもない。しかしただ、膨大な非現実をひしひしと感じていた。こんなに自分をはるかに超えたものが横行している世界など、まるで夢のようではないか。例えば、いま機械類が気まぐれにその車輪の隙間に体を入れたとしたら。機械類の肉片などは跡形もなく飛び散り、機械類は消えるのだろう。

遮断機が上がる。つい先ほどまで、この線路の上をあんな強大なかたまりが走っていたのだと。そう考えると、機械類の感情線に大きなタイムラグと非現実感が生みだされる。おそらく、そんなものを夢というのだと機械類は分析した。甲子園だとか、または今朝見たレム睡眠なんぞ、まさしくそのとおりじゃないか。

こんなところにだって、簡易版の夢は落ちているのだ。

……

【補足】機械類とは人名です。
つまり機械類さんは人間であり、決して思考するアンドロイドとかではないです。
「転校生の機械類さんです。」なんて、それこそ夢なのです。

花の夢

０６２５

――ええ、そうですよ。毎週金曜日の夕方頃に女の子が乗りに来ますよ。ここ数十年は全く見かけませんが。今はもう社会人ですかね。いつ頃会ったかですって？ 覚えてますよ。彼女と初めて会ったのは、えっとたしか、夏の夕方頃でしたね。日にちですか？ いや、そこまでは……すいません、頼りにならなくて。でも、とても蒸し暑かったのは覚えています。終点の一つ前のバス停で、彼女が乗って来たんですよ。最初はただそこにいるだけだと思ってましたから、そのまま行こうと思ってたんですよ。でも、後ろから、「運転手さん、待って！」って。びっくりしましたよ。だって終点まで歩いて三分もたたないところですし、バスを使ってもお金の無駄ですからね。それよりも、もっと驚いたのはあれですね。あの女の子の真っ赤なワンピース。血で染めたのかと思うぐらい、真っ赤でしたから。その子はいつも一番後ろの席の真ん中に座るんですよ。ちょうどバックミラーを見たときの、……ええそこからですよ。目線を前にしても、チラチラと視界に映るんですよね。それで？ 終点についたら、走ってこっちに来るんですよ。まぁ、降りるんですからね……その瞬間はいつ見てもゾッとしますね。あれですよ、ホラー映画で女の子の霊がぽつんと立っていて、気がついたら後ろにいたっていう、そんなゾッとする感じですよ。降りるときもまたすごいんですよ。手一杯の小銭ををもって出るんですから。しかも、五円玉、十円玉ばっかりです。正直あれは勘弁してほしいなと思ってましたね。でも最初のうちですよ。後になっては楽しみにしてましたが。なんか昔を思い出すんですよね。ほら、今の人達ってカードとかでしょ？ 時間短縮にはなりますけど、少し寂しいですね。話したことないか

って？ いえ、あの子とは……あ、一回だけありました。ええ、覚えてます。たしか、八月十二日でしたね。お盆の前の日でしたから。いきなり、「たくさんの赤い花に囲まれた夢を見た」と。あれが最初で最後の会話でしたね。あとはもうめっきり……。内容ですか？ 私も聞きました。でも、「わかんない。でも赤い花に囲まれたのは確かだった」と言ってましたね。……そういえばなぜ貴方はあの子のことについて聞きに来たんですか？ もしかして、あの子のご親戚ですか？ あ、違う……では？ え、そうなんですか？それは残念です。だから突然、会えなくなったんですね。もう少しあの子と過してみたかった……そうですか、あの子が……。私？ 私は今、娘とその旦那さんと一緒に暮らしています。もちろん、孫も一緒です。けれど、そろそろ一人暮らししたいんですよ。若夫婦の中をいつまでも老いぼれが邪魔するわけにいかないですからですね。

しばらくすると、ガチャッとテープが切れた。

また今回も収穫はなかった。

卯月師走は少し背伸びをし、席を立った。コーヒーを飲もうとしたが、カップにはもう入っておらず、余計に飲みたい衝動にかけられた。

「あれ、先輩、まだテープ聞いてたんですか？」

突然、後ろから声がした。振り向くと長身に細身、アイドル顔負けの女性、坂次小春がいた。彼女は大学の後輩で、イギリス人のハーフ。しかも生粋のお嬢様だ。何故そんな彼女がこんな三流の大学、しかも人気のない文芸雑誌同好会に入っているのかがわかならない。

「悪い？ 論文の資料なんだから、これ。今年は十二月までに完成させて提出させなきゃいけないの。本当いいなぁ、二年生は。まだ論文だぁ、なんて焦らなくてすむんだから」

「二年生も二年生で大変なんですよ。最近不景気なんで資格をたくさん取らないといけませんから……コー

ヒー、先輩もいりますか？」
「あ、頂戴。……資格ねぇ、あたしには無縁かも」
「そんなことありませんよ。まだ希望はあります。それよりも、なんで論文の題に千代ちゃん探しを選んだんですか？」

『千代ちゃん』

それは私の幼なじみの名前だ。本名は原田千代、小学三年生の秋頃、突然、行方不明となった。私はそのときから、千代ちゃんの行方を探している。
「別にただ千代ちゃんの行方を調べてて、それをまとめたノートをね、教授に見られたの。でね、これを題にした論文でも作らないかって言われて」
「すごい不謹慎ですね」
「そうね。でもそのおかげで一人で調べてたときよりもたくさんの情報が手に入ったんだよ。このテープだってその一つなんだから」
私は小春ちゃんにテープを渡した。だが、小春ちゃんは無言のままテープを受け取り、興味がないのかそのまま机の上に置き、コーヒーを飲んだ。
やっぱ絵になるなぁ、美人が飲むとインスタントのコーヒーが高級なキリマンジャロに見えるわね。
「先輩、何ジロジロ見てるんですか」
小春が不愉快そうに見てるのが伺えた。
「あ、いやね、小春ちゃんが美人さんだなっていう話」
「はぁ」

そのときだった。ドアが開いて人が入って来た。
「あれ、おはよう。二人とも早いね。いつもなら夕方に来るか来ないかって感じだったのに。もしかして小説書く気になった？」
無精髭をはやしたメガネ、彼の名は上田晃助。は何年も留年しており、みんなからは晃ちゃんと呼ばれている。将来の夢は小説家になることで、毎日、本を書いているが、なかなか賞に入選することは無い。
「晃ちゃん先輩、おはようございます。いえ、師走先輩が十二月までに出す論文を書いていたんです」
小春ちゃんが答える。
「論文かぁ、俺も一応書いたけど、今年も卒業できるかどうか」
「今、晃ちゃんは何の本を書いているの？」
私は聞いてみた。
「今？ 卯月さんと同じ『千代ちゃん』についてだよ」
「え」
何故、という言葉が一瞬頭をよぎった。晃ちゃんと千代ちゃんは何も関係無いはずだ。
私の心情を悟ったのか、晃ちゃんは申し訳なさそうに、
「えっとね、卯月さんの『千代ちゃん探し』の話を聞いてね、俺も『千代ちゃん』について興味が湧いたんだ。『千代ちゃん』のことを本の題材にしようかなって……やっぱり不謹慎だったよね」
と、頭をぽりぽり掻きながら言った。
「……別にいいよ」
この声の主は私だった。何故言ったのか分からないが。
「不謹慎と言えば、千代ちゃんを論文に使う私だって不謹慎だし、それに、もしかしたら晃ちゃんも加わったことで千代ちゃんに近づけられると思うし。あ、言っとくけど私の論文と同じ内容にしないでね」

晃ちゃんは断られると思っていたのか、見るとぽかんとした顔になっていた。そして、その後「え？　本当？」と言って、『千代ちゃん』について書けると知った途端、少年のような無邪気な笑顔になった。
「じゃあさ、今週の土日、二人とも暇？」
「え、暇だけど……小春ちゃんは？」
「はい、とくには」
私たちの返事に満足したのか、晃ちゃんはにんまりと笑い、
「その日にさ、新潟のS町に行こうと思うんだ」
そして一言。
『千代ちゃん』探しをしにね」

＊

赤い花に囲まれた夢を見た。私の背丈よりも高い花。
名前は知らない。でも形は覚えてる。風に揺れているあの花を。
無性にコワくなった。けど、コワくなかった。
はてしなく続く野原に一面の紅い花。
空も雲も全部紅に染まっていて、気がついたら自分自身も真っ赤っか。

「千代ちゃん！」

ゆらゆらと、ゆらゆらと紅い花が風に吹かれてて、

「千代ちゃん！」

一面真っ赤な景色で――――

「千代ちゃん！」

……私を呼ぶのはだぁれ？

*

東京から東北新幹線で行って約二時間半。それからバスで約小一時間。そして歩いて三十分。幼少期から高校まで過して来た町についた。周りの景色は、山、田畑、木の電柱、そこはあきらかにワンテンポ何かから遅れた空気だった。

「何も変わってないな」

私はポツリと呟いた。

「え、そうなの？ だとしたらすごいね、下手すれば大正時代から変わってないんじゃ……町だって聞いて

たけど村だよね、これ」
「昔は村だったけど、最近合併して町になったんだって。……ところで小春ちゃんは？」
ふと、私は周りを見渡した。そういえば一緒に行くと言っていた小春ちゃんが見当たらない。
「あ、坂次さんなら遅れてくるって。夕方頃にこっちに着くって言ってたよ」
「そうなんだ」
「うん。それよりもさ、早いところ卯月さんの家に行って『千代ちゃん』探ししない？　ほら、善は急げって」
「そりゃそうだけど……てか、その荷物はなんですか」
ちらりと晃ちゃんが提げているビニール袋を見ると、中にはたくさんのギンビスのアスパラガスがあった。
「卯月さんのお母さんが好きだって聞いて、ほら二日間お世話になるんだ。もしかしたら何か『千代ちゃん』について知ってるかもしれないだろ？」
どうだと言わんばかりにつまみを見せてくる。どこからそんな情報を仕入れてくるのか疑問に思ったが、母が喜んでくれるのであれば嬉しい。
「ほら、卯月さん、早く早く」
晃ちゃんがせかしてくる。
私は自然の空気をおもいっきり吸い込んだ。
あぁ、昔と何も変わらない。あの山もあの風景も。ここは私の故郷。そして、千代ちゃんの故郷でもある。
この二日間ですべてがわかるわけじゃないけど、きっと手がかりならあるはずだ。

きっと見つけてみせる。
そう心に誓いながら、私は一歩、また一歩と進んでいくのであった。

――原田千代？ 知ってるよ。あの地主さんの家の娘さんだろ？ ちょっと精神が不安定で病弱って聞いたけど。その子について何で聞きたがるんです？ あぁ、あの事件で…めずらしいですね。もう何十年前の話ですよ。今どき昔の話聞いても意味はないんじゃあ。他にも事件はあると思うよ。ほら、今話題の食中毒事件、あれとか。記者の方ならそっち行くでしょ？ え、記者の方じゃない？ へぇ。大学の論文でねぇ……今の大学ってユニークなんだね。僕のときなんて法律についてだったなぁ。あ、話それちゃったね。確か原田千代の祖父母が殺されて、娘が行方不明になった事件でしょ？ 当時はすごいニュースだったよね。結局犯人は見つからないっていうじゃない。女の子は死亡届出されちゃったっていうし。酷だよね、まだ生きてるかもしれないのに。そのせいでか、ご両親狂っちゃったみたいでさ。娘のこと思い出したくないって言って、村から引っ越したんだよね。

「師走、結構早かったのね。急に友達二人連れてくるって言うからびっくりしたじゃない。……こちらさんは？」

母はにこやかに迎えてきた。

「はじめまして。上田晃助と申します。急に訪ねて申しわけありません。これ、お口に合うかわかりませんが、どうぞ。」

晃ちゃんはアスパラガスを渡した。

「あら、どうもありがとう。そういえばあと一人はどうしたの」

「夕方ごろ来るって」

母は、私たちを部屋に案内し、台所へ向かった。きっと、アスパラガスを早速食べるのだろう。

「……いいお母さんだね」
晃ちゃんは言った。
「そりゃお客さんがいるもの。いつもは怖いよ」
私は荷物を置き、窓を開けた。
「ねえ、これから千代ちゃんの家に行かない？　行く途中で、千代ちゃんについて教えてほしいんだ」
「え、もしかして何も調べてないんですか」
「うん、だから話してくれないかな、千代ちゃんのこと」

原田千代は、父、母の三人家族で生まれたときから病弱だった。美人で性格も良し。でも外に出ることが少ないため、友達は私一人。毎週金曜は、祖父母の家にバスでいっていた。けど小三の秋、何者かが千代ちゃんの祖父母の家に侵入し、殺害されてしまった。その場にいたであろうと思われる千代ちゃんは、行方不明。現在進行中。

「警察も、地主の娘ということもあって捜したけど手がかりなし。しかも、証拠と思われるものはすべて警察が保管。もしかしたらもう処分されているかもしれない」
「うわ、最悪だねそれは」
「でしょう」
歩きながら話してると、どっしりとした廃屋がひそかに残されていた。平屋建ての質素な木造住宅である。家の前には、一本の樹が立っていた。
よくわからないが、桜の樹なのだろう。だが樹は、年なのか病気にかかっているのか、よく見てみるとス

カスカしているのが伺える。
「立派な家だね」
晃ちゃんはため息をついた。
「鍵は家主さんからもらってるから早速入ろう」
私は先に立って、引き戸になっている玄関を開いた。
中はカビ臭く、埃のせいか床が白くなっている。晃ちゃんは、埃臭い部屋を次々にあさっていく。
もう何度も見た風景だった。でも、何も千代ちゃんに関してのものは、やっぱり見つからなかった。晃ちゃんに期待するも、やっぱりあきらめの気持ちの方が強い。
「そういえばさ、この家って当時のままなんでしょ？いったい誰が管理してるの？」
晃ちゃんが急に質問してきた。
「ええっと、確か親戚だったかな」
「そっか」
庭のほうから、ガサっという音がした。どきっとして庭のほうを見ていると、たくさんの彼岸花が咲いているのが見えた。
誰かいるの？
私はそのままじっと見続けた。
――そういえば千代ちゃんよく言っていたな、赤い花の夢を見るって。

「あ、先輩、中にいるんですね」
庭のほうから小春ちゃんが現れたのだった。

*

「私のお父さんとお母さんはね、だいれんあいをして私を生んだのよ」
だいれんあい？
「そうよ。だからね、私もそんな人生を送りたいの」
へぇ、私も送りたい！
「しわすもおくれるから大丈夫よ」
ほんと？
「うん。今度お父さんに会わせてあげる。お母さんは無理だけど」
いつ、会わせてくれるの？
「今週はもう会ったから、来週ね」
うん、わかった。

*

「師走先輩の家行ったらここだって言われて。来たんですけど、なかなか中に入っていいかどうか迷っちゃって、奥のほうに行ったら先輩がいたんです」

小春ちゃんはそう言いながら部屋に入ってきた。
「本当、驚かさないでよね。びっくりしたんだから」
「こっちがびっくりしましたよ。庭に入ったら大量の彼岸花が咲いていたんですから。私、彼岸花って嫌いなんですよね。なんか血とかそういうの連想させるんで」
そういうと、慣れた手つきでいろいろ部屋をあさり始めた。
「昔のままなんですね、ここ」
カレンダーを見て、小春ちゃんはつぶやいた。
カレンダーを見てみると、日付が十年以上前のまのだった。日の光にあたってたせいか、紙が少し黄ばんでいるのがわかった。
「そういえば、夕方ごろに来るって言ってたよね。何か用事とかあったの？」
私は聞いてみた。
「はい、父の墓参りに行ってきたんです。ここ、父の故郷なんですよ」
「え、そうなの！」
初耳だ。てっきり都会か外国だと思っていた。
「じゃあ私たち、昔会ったことあるのかもね」
「そうかもしれませんね」
会話はそこで途切れ、沈黙した時間だけが過ぎていった。
気まずい。
小春ちゃんは、棚にあるものや引き出しを一つひとつ見ていた。
本当、美人だな、どのしぐさもきれいで、お人形さんみたい。
ふと、棚の上にある写真たてが視界に入った。中には写真があり、男女に挟まった子が、おそらく千代ち

やんだろう。幸せそうに笑っていた。
「ねえ、小春ちゃんはさ、千代ちゃんのことどう思う?」
私は、聞いてみた。
小春ちゃんは「うーん」と言って、しばらくした後、
「大人とか人の様子とか空気を読むタイプ。周りからはおとなしくて聞き分けのいい子だと思われている。でも本当は感情派。いつも他人の評価を気にしている……ですかね」
「ずばずば言うのね、小春ちゃんって。あとは?」
「そうですね、家庭は複雑で、でも表向きは幸せな家族。将来は肩書きがないと不安。たとえば資格とか」
「そっか」
小春ちゃんのいう千代ちゃんと、私が知っている千代ちゃんのイメージは全く逆だった。
人によってイメージが違うんだな。
十人十色。
そんな言葉が頭に浮かんだ。

「もう、坂次さんが来てくれたんなら、言ってくれればいいのに」
晃ちゃんはそう言いながら、私の持っていた小梅ちゃんを食べる。どうやら、一人で証拠を探しているのが寂しかったらしい。
「すみません。で、次はどこに行くんですか?」
「次? 次は千代ちゃんの祖父母の墓だよ」
お墓への道は、ほとんど他人の家の軒下を通るような、本当にせまい私道を通った。途中、ぽつりぽつり

と彼岸花が咲いていて、そのたびに私はむかしのことを思い出すのだった。
薄暗い路地を抜けると、思いがけなく広いところへ出た。ぽっかりと空いた奥には石があり、それが墓石であるとうかがえた。
「なんか、この下に遺灰があると思うと、実感がないね」
石には、原田家之墓と彫ってあった。
「あれ、これもお墓なのかな」
晃ちゃんの視線の先を見ると、洋風のお墓があった。それはずいぶん新しく作られたものらしく、まだ新品特有の光沢があった。
「奥さんのかな」

そして、私たちは夕食の時間もあるということで、千代ちゃん探しはこれでいったん終わりとなった。
私たちは夕食を済ませ、お風呂にも入ると、すぐに毛布にもぐりこんだ。
みんなはもう眠ったのだろうか。
天井を見つめるが、何も聞こえない。晃ちゃんはきっと、千代ちゃんについて考えているだろう。小春ちゃんは知らないが。また前と同じように、千代ちゃんを見つけられないまま時を過ごすのだろうか。
不安。期待。その二つの感情がゆらゆらと浮かんでは消えるのを夢の中で感じた。

どのくらい眠ったのだろうか。ふと目を覚ますと、周りはまだ暗かった。
のどが渇いた、お水か飲みたい。
私はよろよろと布団を出て、台所へ向かった。

急な階段を降り、角を曲がると、台所の明かりが点いていた。
お母さんかな？
見てみると、案の上母が台所に座っていた。
「あ、師走、ちょうどよかった。あんたに聞きたいことがあったのよ」
「ん、なに？」
私は、グラスに水を注いで飲んだ。
「あんた、まだ千代ちゃんを捜してるの？」
「う、うん」
「やめなさい。もう千代ちゃんを捜すのは。あの子家は複雑だから」
「どういうこと？」
私は、まだ頭が寝ているせいなのか、よくわからなかった。

――原田さんの家のこと？　ええ、知ってるわ。あの家の子、祖父と愛人の間に出来た子供なんですってね。今じゃ社会的にいけないけど、昔はそういうのは多かったから……。旦那が愛人との間に子供ができたときは、もうすごかったのよ。原田家はこの村の地主だから、穏便に済ませたかったはずだわ。でも愛人がそれを許さなかったのよね。ひとまず事態はおさまったっぽいけど。子供？　子供は本妻の息子夫婦が預かることになったわ。その子の父親の名前？　たしか……えっと、原田千代〈センダイ〉だったかしら。いやね、年取るとすぐに忘れっぽくなっちゃうから……。あらいけない！　煮物が焦げちゃうわ！

朝日が出るのと同じに、私は晃ちゃん達をおいて一人で千代ちゃんの家に向かった。
――愛人とのあいだに出来た子なのよね
――父親の名前は千代〈センダイ〉
じゃあ、今まで一緒にいた子は？

『私、千代って言うの』

「千代ちゃんの本当の名前は何なの」
棚にある写真を見て、私はつぶやいた。
――父の墓参りに行ってきたんです。
――家庭は複雑で、でも表向きは幸せな家族。
――将来は肩書きがないと不安。たとえば資格とか。
あの子の言葉がふと浮かんだ。
あれ？ なんで今あの子が？
だとしたら千代ちゃんは…。

「先輩」

振り返るとあの子がいた。

【別記著作者】

山陽女学園高等部一年生　明子
同　蒼倉くく
同　0625

櫻　2010

平成二十二年十一月一日発行

著作者・発行者

山陽女学園高等部文芸部